

紅葉細見

— 雑考四篇 —

土佐 亨

明治の文学あるいは近世から近代への文学の考察に際して、尾崎紅葉の存在は無視しえないにもかかわらず、その研究は乏しい。紅葉の研究の乏しさは、必然の結果として、他の作家・作品の研究に際しても紅葉との関連を手薄にして一面的な考察を余儀なくされる。これには研究者側でも反省がないわけではないが、怠慢とばかりも言いにくい条件がある。今日ほとんど一般読者に読まれなくなっているところから、信頼できる全集の出版が期待できず、研究的な対話を閉ざしているのである。二三を除き作品を読むだけでも困難になりかけているし、伝説・逸話のわりには事実がわかっていなさすぎる。とにかく外形的な全容も見定められているとは言いがたい。事実を無視した研究は有りえないのだから、ささやかながらもその面を解明する努力ははらわれねばならないと思う。

以下は、順序のない些末で気ままな調査の羅列である。学界の水準や当面の要請を無視しているのではないが、一人合点のきらいもないわけではない。しかしいづれ調査解明を果さねばならないことだと考えている。「一 紅葉の

読んだアラビアン・ナイト」は、紅葉が翻案に際して用いた英文アラビアン・ナイトの版の推定、「二 紅葉・秋声の合作雑報をめぐって」は、本文の発見報告とともに、それが紅葉の断念した小説素材であったことを考察したものの、「三 『偽金』の原話その他」は、文字どおり小作品「偽金」の原話の紹介と共訳ものの原拠のいくつかを確認報告したもの、「四 紅葉文献雑記」は、今後の調査のありかたの若干を示し、紅葉談話「文士保護問題」(仮題)を紹介したものである。

一 紅葉の読んだアラビアン・ナイト

柳田泉氏の「翻訳文学年表」によって「アラビアン・ナイト」(以下「夜話」と略称)の本邦移植の状況をみると、明治八年の永峯秀樹『開巻驚奇・暴夜物語』が最初で、明治十六年の井上勤『全世界一大奇書』が続き、さらに明治二十一年に二種ばかり挙げられている。紅葉も「夜話」には早くから関心を寄せた一人で、明治二十二年の「やまと昭君」が前掲のものに続いている。自序に「あらびあん ない

と」に見えたる THE HUSBAND AND THE PARROT
(夫と鸚鵡) の作意を翻案」と述べているが、原話は、⁽²⁾「
の巻」の話中話に翻案的に採り入れられているとともに、
この一篇のすべてが原話の趣向をひねっているのである。
紅葉は自序でこの作が旧作であるとも述べているが、そう
すれば彼の「夜話」への関心は、明治二十一年以前の高等
中学時代にさかのぼることになる。紅葉の読んだ「夜
話」は無論英文である。山岸荷葉の回想「紅葉大人の声」
〔卯杖〕二巻一号、明37・1によると、荷葉は、明治二十
五年ごろ紅葉に英語を教授してもらい、そのテキストが
「夜話」であったと記している。

その当時紅葉大人は、『伽羅枕』『此ぬし』などいふ
小説を書いて居られた。自分は度々遊びに行く。(中
略)友人と『詞海』(土佐注 明25・3創刊)といふ怪
しげな雑誌を出して居た頃であつたから、どうかして
紅葉大人の教へを受けたいと思ふ事はあつても、中々
それが口に出せない。その内に『君に英語を教へて上
げやうぢやないか。』と言ふ事が出た。有難いと思つ
て、『是非教へて下さいな。』『何を教へやう』と言ふ事
になつた。その嬉しさはない。その以前大人は『やま
と昭君』といふ短篇を文庫に書かれた事があつて、是
は『アラビアン ナイト』から翻案したもののだが、あ
の本を教へやうといふ事になつた。それから毎晩『ア

ラビアン ナイト』を抱へては、北町へ行くやうにな
つたのである。

以上の話は、習作期からの紅葉の英文『夜話』の愛読を
示唆しているであろう。紅葉が翻案・翻訳を多く手がけた
明治二十六年前後に「夜話」によつた作品が見あたらない
のはちょっと不思議な気もするが、後藤宙外宛の田山花袋
書簡(明39・3・1)の発見⁽³⁾によつて、明治二十八・九年ご
ろに、紅葉が硯友社の若手に分担させて、『アラビアンナ
イト』を『百奇夜講』と題して翻訳出版する計画をもつて
いたこと⁽⁴⁾がわかつた。どういふわけかこの企画は流れて
しまったのであるが、晩年に紅葉は今一度「夜話」を筆に
している。「東西短慮の刃」(明33)は口演の筆記である
が、この後半の話が「夜話」の「三個の林檎」と題する
物語⁽⁵⁾であると明示している。現在もっとも入手しやすい
大場正史訳『千夜一夜物語(バートン版)』(角川文庫)によ
れば、「やまと昭君」が〈第五夜〉、「東西短慮の刃」は〈第
十九夜〉に、それぞれの原話を見いだすことができる⁽⁶⁾。
ある。

ところで、周知のように「夜話」の版は多いのだが、紅
葉の読んだテキストはどんな版であつたらう。紅葉の蔵書
は、没後大橋図書館(注 博文館創設者大橋佐平の創立)の書
庫に納まつたことだが、⁽⁷⁾現在のところ調査不可能で、
「夜話」の紅葉所蔵本の行方も不明である。英訳本である

ことは確かだが、それさえタウンSEND、スコット、レイ
ン、トレンズ、ペイン、バートンその他と多いのである。
英文では差異のある種々の本文も、翻訳すればその差異は
ほとんど消滅するうえに、ましてや翻案の「やまと昭君」
はほんのあらずじにすぎず、「東西短慮の刃」も添削の多
い口演で、原文のスタイルはうかがうべくもない。だが、
若干ながら調査を進めたところ、ほぼ判明してきたのであ
る。調査した英訳本は、(1)レイン版・(2)バートン版・(3)ス
コット版・(4)版不明のわずかの四種で、はなはだ不十分な
のであるが、運よくこの中にそれとおぼしき本文があった
のである。「やまと昭君」よりも話がくわしく、原文に近
いと思われる「東西短慮の刃」を採り上げて比較してみる
と、紅葉が口演に際してもそのままに生かしたと考えられ
る(a)年令・(b)金額・(c)固有名詞が、版によって異同の存す
ることが判明した。それは、わずかながらつぎの三箇所で
ある。

(a)年令——へ女房と云ふのは近辺に住める某の娘、十二歳
の時に娶つたとしてある。(初版五二頁)

(1) I married her when she was a virgin, ...

(2) When I married her she was a maid...

(3) She was not above *twelve years old* when eleven
years ago he gave her to me.

(4) She was only *twelve years of age* when he

bestowed her on me in marriage,...

〈十二歳〉の年令が明示されているのは、(3)と(4)であ
る。

(b)金額——へ此の林檎の代が一箇一セキンと云ふのである
が……。(初版五四頁)

(1) ...three apples which I purchased of the gar-
dener at El-Basrah for three pieces of gold.

(2) ...three apples which I bought from the gar-
dener for three dinars.

(3) ...three apples, which cost me *a sequin a-piece*,...

(4) ...three apples, which had cost me *a sequin
a-piece*.

へ一箇一セキンと述べているのは、(3)と(4)である。

(c)固有名詞——へバルソラ(初版五四頁他)

(1) El-Basrah (2) Bassorah (3) Bussorah (4) Balsora

いずれも同じ土地の名であるが、へバルソラと読みう
るのは、(4)以外に無い。

(3)と(4)は本文もかなり似ているが、(c)の異同によって、
紅葉の読んだ本文は(4)の系統であると結論づけることがで
きる。しかしこれがどういう名で呼ばれる版なのかは、「夜
話」の書誌・本文にくわしい方の教示を得たい。この書の
書誌を記しておく。

"THE ARABIAN NIGHTS' ENTERTAIN-

MENTS”

London: George Routledge and Sons, Limited: Broadway, Ludgate Hill, Glasgow, Manchester, and New York.

右のように記された一冊本で、訳者や刊年の記載もなく、序文・解題も見られない。著名な話を五十八話収録しているが、何らかの版の抜萃とか重訳や書き更えも考えられるようないささか無責任な本である。

以上によってこの系統の本文であることは確かであろうが、まさにこのルートレッジ社本（仮称）を紅葉が読んだとは言えない。「夜話」は版により、説話の選択や配列・区分等もまちまちで、紅葉は、「東西短慮の刃」の原話を「三個の林檎」だと言っているが、ルートレッジ社本では、The Three Apples の章に原話を指摘できず、そのつぎに続く The History of the Lady Who Was Murdered, and of the Young Man Her Husband の章にこの話がある。この二つの話はかなり緊密に連っており、版によっては The Three Apples の題のままで一連にしているものもあるので、紅葉は、そのように整理されたこの種の本文をもつ版によったのかもしれない。しかし紅葉は、ルートレッジ社本によりつつも、単純な「三個の林檎」という題であえてまとめたということや、無意識的に記憶違いを犯したとも考えられる。なおこの本には、

「やまと昭君」の原話 The Husband and the Parrot も収められているのである。

諸本の検討の不十分や疑問にもかかわらず、実は私は、紅葉の読んだのは、このルートレッジ社本であつたろうと推定する。というのは、当時のわが国における欧米文学は、一般に単なる啓蒙や娯楽の読みものとして受け入れられ、権威のある本文や全集ということとはほとんど問題にならず、安価な通俗版で十分であつたし、紅葉も、語学を興味深く学習するためや、創作の参考にすることを主にしてあれこれ読んでいたのであるから、「夜話」も数巻にわたる集成を読んだわけではなからう。このルートレッジ社の一冊本は、その点で恰好なものであつたと思われる。しかもルートレッジ社の本は、当時のわが国でかなり出まわって入手しやすいものであつたという有力な証拠がある。内田魯庵は、自身よく洋書を読んでおり、紅葉のもとへも出入りしていたが、その彼に、明治二十年代の作家（特に硯友社）の内幕を戯画化して風刺したと言われている『文学者となる法』（明27）の作がある。その「第二 文学者となり得る資格」の章で、へ座右に備ふべき外国文学書として、

(a) ナショナル第五読本 (b) スウキンソン氏英文学 (c) モオレイ “Great Authors.” (d) ルートレッジ板の六「ペンス」小説二三冊 (e) キャツセル板の国民文庫二三冊 (f) シエークスピア全集（グローブ、ライブラリー）位が

手頃にてよし」と、皮肉たっぷり挙げている。(a)(b)は高等中学程度を対象にして博文館で扱っていたが、(d)が、問題の「夜話」と同じ社であることに注意したい。

ルートレッジ社本「夜話」の巻末に附載されている同社刊行図書目録によると、欧米古典の著名作家作品の叢書 Morley's Universal Library vol 63 というのが出ているが、これも前掲の(c)と同じものではなからうか。同

社は多分に大衆的な形で文学書や歴史書を出版しており、叢書以外に挙げられている作者も、明治文学と甚だ縁の深い人々が名を連ねているのである。シェイクスピア、ゲーテ、モリエール、エマソン、カーライル、アーヴィング、ラム、ドーデ、ディッケンズ、デュマ、ユーゴ、ボアズゴベイの作品があがっており、多いところは、ロード・リットン、エインズワース、レバー、マヤット、スコットなどである。しかも値段は 3s/6d と規格的な安価なものが多い。紅葉の読んだ「夜話」の英訳本も、おそらくこのルートレッジ社本であったと考えてよいのではあるまいか。

ルートレッジ社本についての叙上の事実は、調査の方向を示唆し、今後の研究に有効性を期待できるのではないかと思う。紅葉にはほかにモリエールや「デカメロン」の翻案のあることは周知であるが、前記モオレイ叢書の中に、「Plays from Moliere」と「Boccaccio's Decameron」の

二冊も含まれており、出典となった可能性がある。こうしてみると、明治三十年頃までの翻訳や翻案の種本が、このルートレッジ社の本によって多く発見できるかもしれないということは、紅葉だけにとどまるものではなからう。野山嘉正氏の教示によれば、透谷の読んだエマソンもルートレッジ社本であつたらしいとのことである。

以上の調査はまた『文学者となる法』の記述を立証することにもつながっているようだが、こうなると、従来必ずしも資料的に扱われていないこの魯庵の著は、少くとも硯友社関係の研究に多くの示唆を与えるものであらうということも改めて考えるのである。

注

- (1) 柳田 泉『明治初期翻訳文学の研究』(昭 36 春秋社)所収。
- (2) 人見円吉「尾崎紅葉の処女文集」(『学苑』昭 32・12)参考。
- (3) 和田謹吾「花袋論修正」(『国文学』昭 46・1)
- (4) 土佐 亨「近世文学に原話をもつ紅葉作品二種——『関東五郎』『東西短慮の刃』ノート——」(『香椎瀉』17号 昭 47・3) 参考。
- (5) 谷崎精二「広津和郎覚え書」(同氏著『葛西善蔵と広津和郎』昭 47 春秋社)。
- (6) 福岡女子大学図書館蔵。
- (7) 野山氏は、斎藤光氏から教示を得たとのことである。

二 紅葉・秋声の合作雑報をめぐる

まず徳田秋声の読売新聞入社時期について報告し、秋声年譜の一項を確定しておきたい。秋声の伝記研究は、徳田一穂・榎本隆司・野口富士男・和田芳恵の諸氏によって進められてきているが、秋声の読売入社の時期が明確になっていないようである。たとえば榎本氏作成のごく最近の年譜¹⁾には、明治三十二年の項に、二月頃、塾(注——十千万堂塾)解散、牛込築土八幡前に下宿。その後紅葉の世話で『読売新聞』(日就社)に入社。島村抱月のあとをうけ美文の雑報を担当。とあり、野口氏はこの点をかなり考証して、〈彼の『読売』入社を三十二年秋ないし冬とする〉と結論づけていて、いずれも明治三十二年中のこととしているものの、厳密な月日は不明らしい。しかしこれについては読売新聞にやはり記載されていた。明治三十二年十二月一日の雑報欄に、

●入社 画家梶田半古、文士徳田秋声の両氏は本日より入社せり

と報ぜられている。秋声が読売と具体的な関係を持つに至るのは、これより若干さかのぼっても、正社員になったのはこの日からである。

読売に入社した秋声が雑報を担当することになった当初については、自伝小説「光を追うて」(四十八)に、次の

ように述べられている。

初め等(注——秋声)は探訪の提供する種子によつて、雑報を作つてゐたが、碌な材料がなく、何う書いて見ようもないのに困惑したが、するうち彼を引立てるために、先生(注——紅葉)が好い種子を授けてくれた。それは赤い野紙に例の蜀山癖のある字で書かれた十枚ぐらゐの話の聴書で、光妙寺三郎と千歳米坡の情事の荒筋を綴つたもので、舞台は向島の水神であつた。臍脂紅といふ表題が示とほり、小栗(注——風葉)なら兎に角、艶気も素気もない等の筆になぞ乗るやうな代物ではないのは勿論、すら／＼書き流した文章が既に珠玉の文字で、それ以上延ばすことも縮めることも出来ないやうなものであつた。仕方がないから、等は濃い油に水を差すやうにして出来るだけ引暢し、ほんの少しづゝ工場へ送るのだつたが、社内の評判の悪い筈もなく、等も漸と息がつげた。

雑報(三面記事)には記者の署名はないが、紅葉自身おりおり読売の雑報に筆を執っている模様で、実際に紅葉の筆ではないかと思われる記事も見あたるけれども、確認するまでには至っていない²⁾。そういう中であつて、「光を追うて」の告げる「臍脂紅」なる雑報は、紅葉・秋声の合作という素姓明白な、数少ない雑報ということになる。紅葉や秋声にも断簡逸文を採集した定本全集のできるような時

があれば、彼らの筆になる読売の雑報も当然検討を要することになるうし、小説の素材という点からも考察の対象になるが、とりあえずここでは「光を追うて」の一項の考証を果しておこう。

秋声は、この雑報の題を「臙脂紅」だと述べているが、上司小剣の「U新聞年代記」ではほぼ同様の記述ながら、「臙脂虎」という題にしており、また『読売新聞八十年史』では「老女優千歳米坡物語」という題で記述している。題名についても三通りあり、伊狩章氏は、「臙脂紅」を花柳小説と考えられて、そういう作の存しないことを述べられた。だが実際に調べると、小剣の言うとうり、「臙脂虎」という題のつや種の連載がある。「臙脂紅」は題名のわかりやすさからきた誤記であらうし、「老女優千歳米坡物語」は、「臙脂虎」の約一箇月前の雑報「千歳未聞米坡粧」と混同しているようだ。

雑報「臙脂虎」は、明治三十二年十二月十九日より二十七日まで、連続九回にわたって掲載されたつや種である。記事内容に応じた挿画（梶田半古筆？）を入れている日も多い。

紅灯緑酒の際に周旋して、洋服姿の目紛しければとて、口悪の誰かれが綽名して銀蠅と呼びなしたる米巴が當時を語る節々、聞流さんも惜しくて摘みいでたる一つ。

といった書き出しで、秋声の言うように、芸妓あがりの女優千歳米坡の光妙寺三郎との達引艶話を綴ったものであり、未完の完といった形で擱筆されている。千歳米坡は、「金色夜叉」の女高利貸赤檜満枝のモデルとも伝えられ、実際の「金色夜叉」劇でも満枝を演じた艶名と俠名をはせた一代女で、紅葉は米坡とは親しかったのである。米坡は当時もはや姥姥であったが、その情熱は衰えず、時代の先端をゆく洋装は人目をひくとともに贅盛をも買っていたようである。紅葉が米坡と親しかったのは、ともに芝で生まれ育ったという環境からでもあったが、海千山千の女の閱歴への興味からでもあったらしい。とにかく表向きには彼女に対して否定的なことも吐いている紅葉であるが、男女関係の経験も豊かな女の話は、創作意欲に結びつくところも多かったであらうと考えられる。光明寺三郎はすでに故人であったが、長州出身で官軍として戦い、明治初年代をパリに留学して法律を学び、東洋自由新聞記者から官界に入ると、井上馨の信任を得てフランス公使館書記官になって渡仏した。当局と意見が合わず、帰国して明治法律学校で憲法も講じたが、やがて司法省参事官兼大審院判事として法曹界にかえり咲き、明治二十三年山口県より推されて第一議會に列している。通信省参事官ともなったが、志を十分得ぬままに明治二十六年四十五歳で歿した。経歴は末松謙澄に酷似しているが、どうやら明治政府とはあい

いれないところがあつたようで、学識は評価されながら、官界の歩みは傍系であり、彼の死は惜しまれる一面を十分に持っていたようである。

雑報「臙脂虎」は、つぎのような話である。

ある夏の夕暮、霞町千歳屋の芸妓米八は、さる田舎大尽の席に呼ばれ、得意の洋服姿を所望されて出かけていった。その夜はさほどのこともなかったが、数日後再び呼ばれて行くと、座は花札の最中である。だが暑さのままに水神あたりへ席を更えようということになり、出かけた席での酒もしばらくで終ると、そのまま一行は泊ることになった。彼女は酔いと暑苦しさで眠られず、涼もうと庭に出ると四阿に上り、湯具ははずして敷き、単衣は上にかけて団扇を使いつつつか眠りに落ちていった。冷えに目ざめるとはや夏の夜は白み初めている。折しも下駄の音がして、かの大尽が、これも寝苦しさのそぞろ歩きとみえて亭へ入って来ると、裸のまま身を縮めている彼女に、だしぬけに「米八、身が意に従わぬか」とむき出しに言うのであった。米八は、「浮氣の家業なれば、それは随分仰せにも従わぬではござんせぬが」と相手の素姓を問い正すと、大尽は、信州の資産家で一年の大半を東京で気ままに暮す樂隠居の身分と語り出すのであったが、嘘を見抜いた米八は後を向いてあくびをかみ殺している。そして、男に恥をかかせる気かとなる大尽に、「不束ながら私も霞町の名代の

芸者……」とぼけた言いくさはやめにして出直すがよいと啖呵を切って寝たふりをしている。しかし男が、ついに光明寺三郎と実名を明すと、米八も聞耳をたてるのであった。というのは、去年の秋まで米八は富永冬樹に世話になっていたが、その男と縁を断つ時、自分を棄てるからには米八が夫と頼むべきはこの日本には光明寺か末松謙澄しかないと言ったのを思い出したからで、彼女は今この不思議な邂逅に驚くのであった。しかしそれとは色にも見せず、「名は聞いているが、情人にするには年をとりすぎ、旦那にするには金力不足と見たが、いっそ女房に持って下さんせ」出来心には従いかねると、キッパリ言い放つ。光妙寺は、もっともとうなづきながらも、妻にしてはすくない女であるが「惜しむべし芸者といふに難あり」と言い、自分は現今の大臣らが芸者などを夫人にしてはじないのを攻撃してきたのであり、今自分が米八の姿色に迷って言行矛盾をおかしては一代の名折れだと言う。そして女を口説いたというのはこれが初めてであり、望をかなえてくれても沽券は下がるまいとねばるのであった。米八は、それは芸者にけちをつけるものだとかくまで反発し、困り果てた光明寺は、もうこのことは言わぬことにするが、男の面目のつぶし代として百円貸せと言い放つ。男の中の男の面目代の百円とは面白いと、米八が腹をすえて承引すると、光明寺は内証の苦しさを隠さず、負債を逃れて身を隠

そうとしているのだとうち明け、米八にいっしょに日光へでも行かぬかと誘うのであったが、そうした悠長さがただ者ではない度量を思わせるのであった。話はまとまり、その夜の座敷を抜けた米八は、仲間芸者に感づかれて祝儀を半分ねだられるが、面倒とばかり、五円札を二つに引き裂いて半分を投げつけて帰って来る。待ちかねていた光妙寺のうらみ言に五円札一件を話すと、横から肝煎りの柳亭燕枝がまたその半分の札をねだるので、これまた呉れてしまふのであるが、光明寺は米八の気性の闊達に惚れこむのであった。明朝一番の汽車に決めてその夜は芝浜の海水浴にと出かけたが、燕枝はどこから種々の衣装を調達し、聞けば、これを着て一行は殿様・奥方・家令・書生という趣向で出かけるのだと言う。その時光明寺は、米八に時計を贈り、いつか夫婦の契を結ぶべき女のために巴里で買った品を受けてほしいと誠意を見せるのであった。翌日一行は華族主従のいでたちで上、等、列車におさまる。日光では案内に頼んだ老爺の人体をただ者ではないとにらんだ米八が素姓をたずねると、もとは江戸の俠客千歳余五郎を親分に仰いだこともあると言って、余五郎を神様のようにあがめるのであった。余五郎が米八の父であることを知っている光妙寺は、さすがに親子だとその俠気に感じ入る一方、米八は父の思い出にふける。さて日光での豪遊から、三日もたたぬうちに懷がさびしくなったので、米八らは燕枝らをい

ったん東京に帰し、自分らは涼しくなる時分を待つて帰ることにして伊香保へまわることにした。

長々しく述べたが、話しはここで終り、〈其後の話は他日を待ちて綴ることもあるべし〉と結ばれている。

文章は秋声自身が言うように、やはり引きのぼしているのだらう。紅葉の原稿については、「光を追うて」には〈赤い罌紙に……十枚ぐらゐの……荒筋を綴つたもの〉とあり、「J新聞年代記」は〈五六枚綴ちの半紙に、細かに一ぱい詰めて書いてある〉としているが、実際には八千字以上の「臙脂虎」は、そのままではここに述べられているような原稿には収まるまい。素材が紅葉のものであろうことは、これを通して源流に「伽羅枕」や「三人妻」をすなおに思い描くことができることによって認められようし、引きのぼしたために幾分くどくダレ気味になったと思われる文体の陰にも、紅葉らしさ（あるいは紅葉も学んだ雑報的な文体）がうかがえるのである。蹤々（づかづ）・習々（そよそ）・倉皇（そこそ）・槽々（うとく）・幽々（ほのく）等の用字も、『紅葉遺稿』所収の「疊字訓」に見られるような紅葉の好んで用いた字遣いに類似する。

つや種雑報「臙脂虎」は、読売に入社した秋声には、なむけと手助けを兼ねて紅葉が贈ったもので、硯友社の師弟佳話の一つである。秋声は、文学觀の違和をけっして私情に持ち込むことなく、終生紅葉を暖かく追慕していた。と

ところで紅葉における「臙脂虎」の意味は、単にそれだけのものではなかったようだ。へすらく書き流した」というこの〈珠玉の文字〉は即席というのではなく、実は、紅葉がいつか小説にまとめたいと念じ、人にもそのことを語って暖めていた材料だったのであり、「臙脂虎」自体に見られるように、まとまらぬままについてや種として流産に決して秋声に与えられたものだったのである。「文芸倶楽部」(四巻三編、明31・3)の時報「紅葉氏の『モデル』」がそのことを告げている。全文を掲げよう。

尾崎紅葉氏先きに『伽羅枕』なる一篇を著はして、艶麗の文よく人情の機微を穿ちしが、斯は其主人公なる遊女佐太夫の実歴を、殆ど事実其まゝ記せしものゝ由。然るに氏は此頃更に老妓何某の実歴を聞き糺し、之れを得意の艶筆もて書綴らんと、之れが脚色を推敲中なりとか、然るに此老妓は、佐太夫の如く籠の鳥にはあらで、身体に自由の利く芸妓なれば、随つて其働きの場面も広く事実も面白く、特に故光妙寺三郎氏に就ての艶話の如き、頗る詩的材料に富み居り、之れを書ば、必ず『伽羅枕』よりも面白からんと語られぬ。吾人は其作の出るを今より翹首して待ん。

以下、この間の経緯について、「新著月刊」の記事(『唾玉集』収録)と後藤宙外の回想『明治文壇回顧録』をもとにして考察する。

宙外は、〈明治卅年の秋の頃(中略)『新著月刊』の社会欄の材料の爲め〉に千歳米坡の閱歴談を聞きに訪ねていった。米坡談話「芸者と客の今昔」は、十月号に掲載されている。芸妓の衣装・接客態度・気風・情夫・内証等の今昔について、例えば、〈彼の以前は旦那取を劇く仲間で軽蔑したもんですよ、『彼の人は髯の生えた旦那がある』てえと、皆が善く言ひません、しかし薦や役者を情夫にして居る者は貴かつたねえ、今ではまるでアベコベです」などといったような調子である。すでにその年の六月号に談話「小説家の経験」を載せていた紅葉は、多分寄贈されてくる「新著月刊」でこの米坡談話を讀んだのではなかったろうか。旧知の仲であったこの老妓との会談を思い立ったようである。〈明治三十年十二月頃〉、紅葉を囲んで門弟や宙外との女性論「恋愛問答」(「新著月刊」明31・1)が行なわれたが、その冒頭で紅葉は、〈過般米坡と此所(明進軒)へ来て恋愛論をした〉と述べているから、米坡との対談はいくらもへだたっていないであろう。現在の『金色夜叉中編』の掲載終了である十一月六日以降から十二月最初のあたりであったと考えられる。翌明治三十一年一月十四日より『金色夜叉後編』が連載されるが、米坡との対談は、宮の痛切な悔悟や満枝の執ような求愛が描かれてゆく後編以降の構想に関連しての研究という意味合いがあったのだと想像する。話題に恋愛論のあったことは確実である。その

後「恋愛問答」の掲載された「新著月刊」を読んだ米坡が宙外に異議を申し送り、再び宙外が米坡を訪れて行った談話が、三十一年三月号の「維新前後の俠客」である。この談話で米坡は自分の素姓を語っているが、「臙脂虎」に共通する記述が目につき、「臙脂虎」は、そのはしがきにもあるように、米坡談によっていることは確かである。

以上の経緯で紅葉の内部に形象への意志がかたちづくられていたのであるが、その「金色夜叉」への反映や、作品の独立化と挫折は、紅葉の文学とどのようにかかわっているであろうか。のちのことばではあるが、紅葉は、

へ明治の婦人を書いて見たい」というのが「金色夜叉」執筆の意図のひとつであったと述べている。⁽⁵⁾「芸者と客の今

昔」という米坡談の題名が、女性一般の移り変りに拡大しうる問題として紅葉の関心を魅いたであろうことは推察できよう。金か愛かの選択にさまよう当代女性の心理を描こうとする紅葉にとって、参考にすべきものがあると考えられたのである。だが「精神的な愛」の重要を考えていた紅葉に、米坡は恋愛イコール肉交と断言したらしく、両者は対立することとなったようである。米坡も極言したのであるが、これは紅葉にとって、へ学問もないし、趣味も低い（中略）境遇の然らしむる所」と受けとられたために――要するに玄人女の考えとして理解し――、濃厚な満枝の求愛に反映させる一面のあった以外は、そのほとんどを

捨てねばならぬ結果となったのであろう。だが遊女佐太夫の事実を写したという旧作「伽羅枕」を、へ実際は明治の文壇に出すべきものではない。明治初年頃の旧作家が書くべきものゝだと否定していた紅葉にとっては、性を一義として広言する米坡に玄人女性の或る明治的典型を見出す機縁になったようである。江戸的な佐太夫と明治的な米坡という紅葉の把握が読みとれるのである。「恋愛問答」で鏡花が米坡と佐太夫の違いを質問したのに対して、紅葉は、佐太夫は男をだまし翻弄するのが面白くて真実の恋愛のできない女性だというように述べている。それに対して、全てを捧げつくし情熱に身をやいて遍歴した米坡に近代玄人女性を見出したのであろう。

未完でもあり合作でもあるつや種雑報ゆえに、また雑報文学の止揚をも目指していた紅葉ゆえに、「臙脂虎」から直接に紅葉の意図を抜き出すのは危険である。だが雑報的にくずれた文体の陰からも、米八の描写を通じて、金銭や名声を笠に着た男性の女性蹂躪に徹底して抗議し、弱点をさらけ出しての真情のふれあいに共感する紅葉の傾向は見出しうるように思う。こうして俠斜の世界から義俠と性愛に賭けて自己の自由を生き抜く女主人公の小説が成立する機縁はあったのである。だがそれがどれほどの近代性を獲得しうるかは疑問であろう。俠斜の世界に捨身で生きる女性の美しさは、俠斜という環境に条件づけられているので

あって、普遍性を持ちえない。彼女が一般社会に引き出されて来た時にいかに抵抗を生き抜くかにこそ問題があるのだが、紅葉の限界もそこにあるようだ。予見しうる宮の像や、ほぼ理想の妻を「多情多恨」のお種に見ている点などからも、そのように言えると思う。「臙脂虎」が光明寺と米八の実質的な結婚生活が始まる直前で擱筆されているのは偶然ではあるまい。米坡をヒロインとした独立すべき小説も、恐らくその辺で構想が頓座していたのではあるまいか。紅葉が結婚後の米坡について知らなかったというのではなからう。米坡談話には確かに述べられていないけれども、聞こうと思えばその後でも聞けるのであり、たとえ聞いていなくても創作は可能であるはずだ。つまりその後の米坡は、つや種雑報にはなりえないのである。米坡の実際は知りえないけれども、「臙脂虎」の一種の中絶は、結婚を境とした米坡像の落差を予想させるものがある。そして小説としても、紅葉は結婚後の米坡像を形象しえなかったであろう。紅葉の想念と結婚後の米坡のあまりの断絶が、止揚を果しえずして素材の放棄に終る結果となったようだ。「臙脂虎」の話の範囲では、西鶴の「二代男」「二代男」の名妓や「一代女」の或る種の説話と同じ段階に達しており、紅葉自身は、「伽羅枕」の佐太夫を越えた——意気を感じて身を捧げる——女性を或る程度形象化しえていたのかもしれない。(私には、或る意味で佐太夫の方に人

間の深淵を感じさせるものがあるように思うのだが。)だが、悲惨小説・社会小説・家庭小説らが採り上げつつあった家庭内部の女性像を視野に入れつつ考える時、紅葉は、できていたかもしれぬ前半部と作らるべき後半部との違和、あるいは後半部の実際があまりにも現実と逸脱していることを認めたのではないであろうか。私の想像はゆきすぎているかもしれない。だがこの認識は、女性の現実の苛酷さへの開眼と、主観にまかせた安易な創作への禁止を強いるはずのものであらう。この小説化を断念した紅葉に何らかの内的な葛藤はあったはずであり、私はそれを右のように想像するが、このことは、必ずや当時の「金色夜叉」のただならぬ断続にも関連するであらうし、その後の紅葉の或る可能性を望みさせるのではないかという見方に誘うのである。

千歳米坡をモデルにした小説、それが放棄されたのはいつであつたらうか。小説化を思い立って約二箇年たった明治三十二年の歳末、紅葉の断念した素材の残骸を秋声はつや種雑報に引き延ばしていた。紅葉の煩悶と秋声の鬱屈が泣き笑いで結びついた小さなエピソードである。

注

(1) 榎本隆司編「明治文学全集68『徳田秋声集』昭46」所載年譜。

(2) 野口富士男『徳田秋声伝』(昭40)。

(3) 土佐 亨「三人妻」の周辺——紅葉と読売新聞——

(福岡女子大学「文芸と思想」35号、昭46・12)。

(4) 伊狩 章「硯友社時代の徳田秋声」(「国語と国文学」昭31・5)

(5) 諸家「金色夜叉上中下篇合評」(「芸文」二巻、明35・8)。

(6) 「金色夜叉」の「読売新聞」初出の表示は別に試みねばならないであろう。ちなみに「続編」(六)の二の終了が明治三十二年五月二十八日、(七)の開始が同年十二月四日であることを示しておく。

三 「偽金」の原話その他

——紅葉関係作品原拠ノート——

1 「偽金」の原典

「偽金」(「新小説」七年一巻、明35・1)は、中国種であることを明示している唯一の紅葉作品である。原拠が清代の怪談奇譚の集『咫聞録』巻九の「嫁禍自害」であること、ならびに原典の繙読が、前年の豆州修善寺温泉での病養中であつたことは、紅葉自身が本文最初に述べている。紅葉は明治三十四年五月六日より十六日まで修善寺へ保養に出かけていた。その間の日記「修善寺行」と読売新聞の掲載書簡「修善寺より」(明34・5・15)によって明らかである(中央公論社版『尾崎紅葉全集』第九巻所収)。「修善寺行」より抄出すれば、(五月十日 十時過より咫聞録を繙く)同日十一日 雨繁く気甚寒し終日咫聞録を読むと記されている。

る。

『咫聞録』は全十二巻、清の慵訥居士著とあり、約二百五十篇の話説を収めている。慵訥居士については当時から不明の模様である。成立について紅葉は、(自序は道光己丑と記してある。則ち我が文政十二年に当ります)と明示している。道光九年(一八二九)というわけである。しかし『筆記小説大観』(新興書局発行)に収める影印本によれば、自序に(道光癸卯歲孟夏慵訥居士書於荷鶴軒)とあるので、道光二十三年(一八四三)わが国の天保十四年の成立となる。紅葉の明記ぶりから推して、異本関係を考えてよいようであるが、私にはわからない。以下『筆記小説大観』所収の本文を紹介するが、原話は巻九の第五話である。原話が紅葉の記述と同じく巻九に存すること、また「偽金」に数箇所ある原典の書き下しが以下の本文と同じであることから、紅葉の読んだ「嫁禍自害」の本文と差はなからうと思う。

嫁 禍 自 害

嘉興某典肆中。一日。有青衣輩数人。袍服整潔。侍従皆小艾。入肆。問有朱提幾何。答曰。若有物質。不拘多寡。具質之。奚必問資數也。其人去。移時。昇一篋至。延之入。啓視之。皆黄金所製重器。燦爛耀目。約值不啻万金。對肆人而言曰。此乃某府之物。緣主人有要需。欲

質銀三千。肆人知若府之有是物也。允其質。而如數書券。平金交訖。既去。細視之。乃銀胎而金衣也。然已無及矣。肆中定議。凡質偽物而虧其本。攤償于肆中執事人。此物虧金過多。而執事修上無幾。即終歲停支。非十余年不能清此賠項。而依肆度活者。家口賴何養。咸皆瞪目呆癡。肆主出。見衆執事之形。問之。具以情告。肆主亦以賠金數多。不能令其枵腹從事。因念彼以偽物誑金。必不來贖。乃生一計。令各執事不許聲張。命另書偽券。密棄諸途。俾行路者拾之。必將利其中之所贏。而具資以贖焉。則嫁禍于人矣。早起。有某生赴市。拾焉。視券中之質本甚大。意必貴介所遺。若贖而鬻之。獲利必厚。無如家僅糊口。並無余資。遂欣欣然謀諸親友。咸皆念某生平日之清正謙和。樂與湊銀以贖。使之得利。以豐其家。均皆允諾。生邀親友同至肆中。持券向問。請開篋以視。肆中人道。當僅而曰。即來看物。足下能甯買此券乎。曰然。肆中人即發篋陳示。且炫稱物之貴重。以歆動之。歸即湊三千金與生。生加子金。依券贖回。載而鬻諸五都之市。歷視數家。俱曰偽金。竟無售主。砍而驗之。乃白金為胎。外裹黃金許厚。計所值不過數百金。某生計鬻以肥家。今傾家不足以償貸。号哭而回。次早。徘徊河干。赴水覓死。忽有過而問者曰。子非贖偽金者乎。曰。子何以知之。曰。吾見子之形而知之也。子即回家。携所贖偽金。隨我而往。必獲償子之資。毋戚也。我在此俟

汝。然勿令人從而來。生思鬻偽金。死也。不鬻。亦死也。不如即併其偽而棄之。因從其言。回家携偽金而從。聽其所為。携生同登小舟。行一晝夜。其人先登岸。入門。有頃。數人出。向舟揖生登舟。引進其門。見堂高數仞。廊廡華麗。蓋即向當質金之家也。昇進質物。驗視無訛。謂生曰。子之累不少矣。設筵款待。留數日。計償質及子金外。又贈資斧。遣之歸。生於是得無苦。不數日。前青衣者。忽挾資持券。至某肆中。取所質物。肆中大驚。肆主無策可解。願受罰賠。喪貲數萬。乃完其事。肆中資本一空。肆主曰。吾憐衆執事之不能受此重賠。而設此計也。誰知自拆其肆。此亦數也。付之一歎而已。後逾年。金陵某典肆。亦有質偽金器。一如禾中故事。肆主曰。禾中肆欲脫己害而陷人。其心尚可問乎。不如隱忍焉。其失也猶小。既而密構金匠。做其物而為之。輕重大小。一如所質。無少差異。越月始成。因号于衆曰。某質偽金。喪本已多。是物恰可以偽亂真。然難逃識者之目。與其見是物而歆噓。不如燬此物而免害。約某日携赴報恩寺。邀郡中各肆商。同往觀之。衆商閱畢。即熾火于鼎。而冶鎔之。衆商不知其計也。郡中喧伝其事。質金者聞物已燬。心起訛詐。具資持券來購。肆中人裝若慌張。執券故為遲遲。質金者逼其平銀而納諸匱。須臾。拳篋昇之。質者再四熟認。喪氣而去。吁同此一轍之事也。同設計以沽其害。一以喪肆。一得安全。蓋視其心之正不正耳。天

下欲嫁禍于人者。不至害人性命。或可幸而免爾。若欺人以貪。而設陷阱。彼墮術者。幾至身家不保。冥冥中豈無照鑑在茲乎。況禾商之計。祇顧目前。未曾慮及事後。此下愚之智。禍之旋踵已早。見之。何足為詐也。若金陵之商。可為譎而不失其正。是真詐也已矣。〔以上、一部を当用漢字に改めた。〕

「偽金」は「嫁禍自害」を口演体に改めたもので、事件の中味に出入りはなく、大体忠実に原文を追っているが、話を採り上げる態度は根本的に異っている。『咫聞録』全体の傾向でもあるが、原話は談奇性が豊富であるにもかかわらず教訓性を主意にしている。心の正邪が成功失敗を決するといふのである。自分にふりかかった禍を他人に転嫁し、人を迷わせ不幸に陥しいれようとしても、それは不可能であるばかりかかえって自分が大失敗すると述べている。紅葉はこの部分を省略した。また、最終的な失敗で破産した店主がへこれも運命であるというふうに洩らしていることばも省略している。紅葉は運命の帰結として話を綴ってはいない。原文末尾のへ祇だ目前を顧て、未だ曾て事後に慮り及ばず、此下愚の智……のみに書き下して終ることによって、善悪のもたらした運命という原話を、賢愚の差のもたらした状況という合理的な話に変えてしまっている。そして作品は、かけられたペテンをまたペテンに

よって報復するという二重三重の巧智の錯雑が興味の焦点なのである。「偽金」成立の直接の動機も、作中に述べているように、眉山宅での硯友社の小説口演会（明³³・3・11）で演じた「茶碗割」の原話『昼夜用心記』中の詐偽説話と同巧であることを発見したからであった。原話の運命性・教訓性を、能力技巧の問題に置換して合理化するところに、明治の時代性と紅葉の都会人的性格を見ることができよう。

2 その 他

紅葉の關係した翻訳・翻案で、欧米作品に原拠があると推測されながら、まったく不明のものと、原作者名が記載されていて原作の突きとめられていないものがある。後者の確認できたものを以下列挙する。原作者はそれぞれ著名なので、邦訳題名は、各全集や岩波文庫本に依っておく。

(1) 「胸算用」

紅葉山人

〔「文芸界」第一号、明35・3〕

原作 ドストエーフスキイ「クリスマスと結婚式」

Iolka i svadba 1848

(2) 「をさな心」

瓶夢生・紅葉山人訳

〔「新小説」七年三卷、明35・3〕

原作 A・ドーデ「最後の授業」La dernière

classe (『月曜物語』 Contes du lundi 1871—
1873 所収)

(3) 「投書家」

夏葉女史訳・紅葉山人閱

(『新小説』七年三卷、明35・3)

其一 投書家 原作「通信員」 Korrespondent

(ツルゲーネフ『散文詩』Stikhotvo-
renia v proze 1882 所収)

其二 石 原作「岩」 Kamen (同右)

(4) 「ツルゲーネフ小品」 夏葉女史・紅葉山人

(『新小説』七年四卷、明35・4)

其三 神の宴 原作「神の宴会」 Pir u verkhno-

vnogo suschestva (ツルゲーネフ

『散文詩』所収)

其四 鉄臭 原作「黒い人夫と白い手の人」

Chernorabochij i beloruchka

(同右)

其五 火中の花 原作「ばら」 Roza (同右)

其六 三女相行 原作「NECESSITAS, VIS,

LIBERTAS (必要、力、自由)」(同

右)

(5) 「女」

瓶夢生・紅葉山人共訳

(『新小説』七年九卷、明35・9)

原作 モーパッサン「大佐の考え」 Les idées du

colonel 1884

(6) 「月と人」

夏葉女史・紅葉山人訳

(『新小説』八年九卷、明36・8)

原作 チェホフ「別荘の人びと」 Dachniki 1885

(7) 「写真帖」

夏葉女史・紅葉山人訳

(『新小説』八年二卷、明36・10)

原作 チェホフ「アルバム」 Albom 1884

(8) 「路迷ひ」

紅葉山人

(『文芸倶楽部』一〇巻二号、定期増刊「ひと

昔」明37・1)

原作 チェホフ「道に迷った人びと」 Zabludsch-

ie 1885

(9) 明治三十年十二月の「太陽」に、ヘデカメロンの翻案

『銃の鉛』があると記載している紅葉年譜があるが、こ

れは誤りである。「太陽」(三巻二五号、明30・12・20)の

「秋の声」という秋声会俳句欄の紅葉の俳文「銃の銘」

(署名 十千万)の誤記であろうし、またこれは「デカ

メロン」とも関係はない。

(10) 「墮地利兵士のなりの果」(『海国少年』一年二号、明30・2)

も紅葉年譜に挙げられている。作中の記述によって、原
作者はドイツの大衆作家ホルン Wilhelm Oertel Horn

1798—1867、原作は「二人の胡弓師」Zwei Geigers。ただしへなにがし訳」とあるのみで、紅葉であることの証拠は示されていない。要考証。

四 紅葉文献雜記

附・紅葉談話「文士保護問題」

研究の直截的な助成には、何よりも作品の探索とその翻刻紹介を必要とするが、紅葉は特にそれに該当する一人である。そういう点で、昭和女子大学近代文学研究室編『近代文学研究叢書7』（昭32）の「尾崎紅葉」の部に収める「著作年表」は、誤りや遺漏が避けがたく存するにせよ、現在のところもっとも詳密であることは確かで、微細な作品の所在を知るにはまずこれに依らねばならない。この年表は、刊行物に手広く当たった労作であるが、あらかし活動範囲に見通しのつく作家と違って、紅葉の交際範囲はかなり広いのであり、文壇の名士という通俗的に名誉ある存在として文を乞われることしきりで、どのどんな新聞雑誌に句や文を掲載しているかわからず、他人の著書に贈った序文などもさぞかし多いのではないかと思う。刊行されたものでも、硯友社・藻社・読売新聞・博文館・春陽堂・俳句に関連した刊行物を中心に、再確認と調査の拡大が必要なのである。わずかの調査からでも「中学新誌」「反省雑誌」等に句や文の載っていることがわかったし、遺稿とし

て単行された小説「¹著作夢中夢」の存在は、年譜類も洩らしている。作品の再掲といふことはよくあるが、「夏瘦」という作品は、読売新聞（明23・5、「紅葉全集」所収）に出たものと『森の下露』（明32・10、大阪商事新聞）所載のものとは、まったく別種の作品であることも注意しなければならない。作品蒐集は、へ紅葉、こうえふ、紅葉山人等の署名だけを当てにするわけにはゆかない。紅葉の名を署した鏡花の初期作品とか、晩年の翻訳「鐘楼守」（明36）が秋声の仕事であるなどは有名である。また逆に紅葉以外の筆名はどうか。特に著しい極初期のものは勝本清一郎氏が判別しているが、氏はさらに読売新聞の劇評で「芋太郎」とあるのが紅葉であると重要な指摘²をしているし、管見ながら、同新聞の書評の署名「余情生」が紅葉であることがわかった。紅葉文献の蒐集には、当時密接に関係した人物のことばを探して手がかりにする必要がある。作品の探索に関連して同時代人の回想等二次的な資料調査の拡大も余儀なくされるのである。

紅葉の病没とともに各誌に特集などがあるが、未見ながら、「仏教文芸」とか「商工新報」「信濃評論」とかいふ雑誌までが特集するなど文章を載せているらしい。紅葉とその文学のひろがりの大きさがしのばれる。また比較的新しい雑誌でも注意しなければならないのは、関係者がつい最近まで多く存命であったことによる。江沢春霞「紅葉と美

妙」〔改造〕昭2・11）は、紅葉・美妙の両者に幼時から親しんだ回想であり、紅葉の父谷斎についての記述も含むが、これを勝本氏も採り上げていないのはちょっと不思議なくらいである。

以上は従来の年譜類や論考から洩れているものの一斑にすぎない。こうした紅葉については、逸文などと言っても實際限がないくらいであるが、重要と思われるようなものは、漸次紹介してゆくことも無意義ではなからう。

周知のように紅葉等硯友社の作家は、論をことごとしく発表することを好まなかった。小説家は小説で勝負すべきだと割りきっていたから、その方面の文章はいたって少ない。論のある作家は、その論を手がかりにして研究を方向づけられる場合が多いのだが、紅葉の場合のやりにくさはこの点にもあるだろう。もと「新著月刊」に掲載されて『唾玉集』（明39）に収められた「小説家の経験」「恋愛問答」の二篇の談話は、一般に知られている数少ない紅葉の論として重視され、しばしば引用されるものであるが、「小説家の経験」にはさらにそのあとがある。紅葉自身「小説家の経験」を踏まえて語った談話筆記「紅葉山人を訪ふ」（『文芸倶楽部』三卷一〇編、明30・7）の存在は注意されておらず、年表類も落としているようだ。いささか長文にわたっており、今は掲載の余裕が無いので指摘するにとどめ、それに代えて、もう少々短い談話筆記の全文を復刻し

て場ふさぎとしたい。資料紹介の手はじめとなれば幸いである。

文士保護問題（『太平洋』第二〇号、 明33・7・9）

私は文士保護を必要だと思ひます。元来斯かる要求をせざる可からざるに至つたのは、社会が没趣味であるからだ。殊に日本は小国で、且つその文章が特殊的である、即ち世界に同文の国がない。だから仮令作物が出ても購買者が非常に少ない。購買力が強ければ随つて文士の報酬が多くなる。報酬が多ければ余裕が出来、余裕が出来れば思索も研究も出来、遂に雄篇大作を出し得可きである。私は文士の保護を要求せんには、第一保護とは何ぞやとの問題を起し、それに対して解釈を下した後でなければならぬと思ふ。保護の文字は元来語癖があつて一寸聞くと可笑しく聞えるが、或る場合は金銭とも採れ、又権利上とも採れる。けれども私のいふ保護の意味は、余裕を得るに在るのだ。而して其の方法にも色々あるが、何れにしても此の実行は容易な事である。現に美術家の保護の如きは実行せられて居るではないか。既に保護を受けて文士に余裕が出来たとすれば、衣食住の点に於ても他の紳士と共に対等なる交際をすることが出来る。さうなれば時々自分の家でも宴会を開きて、名士を招待することが出来るけれども、今日の処では他に招かれて

もその返礼が出来ないと云ふ様な有様である。語にも『衣食足而後始礼節』とあつて、生活が裕かで衣食に奔走する労苦がなければ、創作に充分の力を注ぐことが出来る勘定であるのだ。素と文士が生活上社会に立つて、他の富者と平衡を保ち得たならば、保護せられる必要はないのであるが、現在日本の形勢では、逆も保護を受けずには行けなからうと思ふ。故に文士の保護は永遠に必要なのでなく、社会が趣味を解し文士を優遇尊敬し、その結果、作物がよく売れるやうになつて来る程度迄必要だと云ふのである。即ち文士の保護は一時的であるのだ。また文学は国民の思想界を支配するといふ様な傾向があるから、之が盛衰は、社会が趣味に富むで居るや否やを卜するの筈竹となるのである。文学は単に人に娯樂を与へるのみでなく、大に教訓的責任を有して居るものである——国民の品性を高め、趣味を解せしめ、その理想を高くするといふやうな抱負を把持することが必要であると同時に、文士自らも亦大に品性を養ひ理想を高むることが必要である。それ等の要求を充たしめやうとすれば、即ち文士を保護して余裕を与へて内顧の憂なからしめ、猛進して美神の宝庫を開かしめるが肝腎だ。それで今の社会は何うだかと云へば、没趣味で理想が低くて、文士の尊敬す可きものであることをすら知らない。況んや何うして文学を評することが出来やう。斯くいふ

有様であるから、私共は進んで国民の思想を啓発誘導して、忠実な美神の僕たらしめ、前に言つた目的即ち文士保護の要求に応じさせやうと思ふ。而して保護者は之を、政府と社会との二つに分つことが出来るけれど、我輩は政府に対して保護を要求するが近道であらうと思ひます。が併し被保護の後とて、何等の干渉を受くること無く特立独行して創作をしたいと思ふ。政府より彼だとか斯だとかいふ様な干渉を受ける位ならば、寧ろ始めから要求しない方が可からう。文学の維持は素より必要であるけれども、蹂躪せられて迄も存在したくない。我輩は断じて文学の神聖と特立とを主張すると共に、社会が敬虔忠実なる觀念を以て之に對することを要求するのである。文士保護は畢竟我輩一己の私情より要求するのではなく、社会その物に保護す可き義務があるのだ。今言つたやうな次第で、文士保護は實際問題で空理空論ではないのである。若し我輩に余裕を与へて呉れて、充分に觀察し、研究し、思索することを得せしめたならば、雄篇大作また期す可からざるに非ずだ。保護を受けるのは不見識だとか何だとか彼だとか云ふのは、要するに愚劣な者の言である。實際斯る例は外国にも沢山あつたが、何れもその結果は好つたやうだ。終に臨んで私は、日本の上流社会がもつと文学趣味を解して、文士を尊敬し文学を保護したならば、下層社会にまで其の影響を及ぼ

し、国を挙つて有文の民となるであらうと考へます。

〔傍点は原文のまま。当用漢字に改め、句読点を整理した。〕

この紅葉談話は、「太平洋」記者西村醉夢に語られたもので、談の最初に醉夢のことばがある。

目下文壇の問題となれる文士保護に関する意見を聞か
んが為め、露伴紅葉緑雨魯庵の諸氏を訪問し親しく其
説を聞くを得たり。(中略)尤も時日切迫の為、此の
原稿を諸氏に示して検閲を乞ふの暇なかりしかば、定
めし錯誤もあるならん。また行文は言文一致を勉める
たれど、這是諸氏の口吻を模したるにあらず。仍ち文
字上の責は総て記者にあり。

「文士保護問題」のタイトルで、(一) 幸田露伴氏(略)、
(二) 尾崎紅葉氏の二談話が当日掲載されている。醉夢の
注記にもかかわらず、この談話にはそれぞれの話者の口吻
が反映しているようだ。紅葉の論はたしかに粗雑であり、
卑近な現象に慣れ合わせる欠点があつて、なぜ自分は創作
するのしなければならぬのかという対自的な観点がな
い。文学の独自の価値観の反すうもないために、作家の経
済的困窮のみをボヤいて政府の保護を安易に要求してい
る。そうして創作を通じて社会に訴える自己の姿勢を検討
することなく社会を未開な没趣味として難ずるあたり、国
家・民衆・作家の位置の把握に抜きがたい旧さのあること

は否定できない。だが、曲がりなりにも芸術至上主義を押
し通し乗り切ろうとするところに、過渡期の首領の面目が
うかがえるのである。

注

(1) 尾崎紅葉遺稿『夢中夢』(昭3・3、改造社)。末尾に
「明治二十一年作」とあり、勝本清一郎「関西人尾崎紅
葉」(「自由婦人」昭23・11)も初期の作品であると述べて
いる。

(2) 勝本清一郎「鏡花の異神像」(「解釈と鑑賞」昭24・5)。
これは「早稲田文学」(一二号、明25・3・30)の「時文
評論」の「劇評界」に「芋太郎(紅葉)」とあるのによつ
ているのかと思う。

(3) 大橋乙羽『花鳥集』(明32、博文館)の巻末に「是々非
々」という往時の乙羽作品の評を集成しているが、その書
評「露小袖」(「読売新聞」明23・10・30)の注記。

(4) 「卯杖」(一二号、明36・12)の「雑誌索引」より。

(5) 勝本清一郎「紅葉の血統——関西人の文学——」(「文芸
評論」2輯、昭24・4)など。

(6) これについては、最近、森英一「〈田園〉文学論」(「国
語と国文学」昭47・9)の注1に解説がある。

〔附記〕本稿は昭和四十七年度福岡県国内研修職員としての研
修成果の一部である。なお清水孝純氏の教示を得た部分
がある。